

【第9回北陸地域連携プラットフォーム 平成28年2月19日(金)】

演 題：「石川・金沢の伝統文化 もてなしの心」

説明者：茶道裏千家今日庵業躰 奈良宗久

御紹介をいただきました奈良でございます。本日はよろしく申し上げます。北陸地域連携プラットフォームということで、北陸3県の方がお集まりの中、こうやってお話の機会をいただいて、誠に感謝を申し上げます。

私の専門は茶道ということで、実際、昔から当家は焼き物の家なので、現代工芸や日展にも出していますし、現代工芸美術家協会の会員、美術館の学芸員もしていますので、そういった方面から専門のお茶ということ、それから、いかに茶道と金沢、石川、そういうゆかりが深いかというお話をさせていただけたらと思います。本日はよろしく申し上げます。

(以下、スライドを紹介しながら説明)

この石川県、特に金沢というところは、お茶が盛んと言われていますが、いかに関係が深いかというところをお話させていただきます。御存知のように前田利家公、400年以上前、最初は七尾に入られまして、元々福井の武生の方から府中三人衆ということをおっしゃって、それから七尾、金沢に来られるわけです。最初に仕えたのが信長公、信長公が何をされたかという、茶の湯御政道。元々鎌倉時代に禅とともに抹茶というものが日本に入ってくるわけですが、禅宗とお茶というのが深く関わって、鎌倉幕府、そういうところから武士がお茶をしていくという時代になっていく。信長公はそれを、お茶と政、政治を司ったわけです。色々なところでお茶会をされて、そういうところで一対一でお話をする。色々な名物道具である当時の唐物、中国から来た宋時代のものなどを信長公に献上するという、師弟の関係を築く中でお茶というものをつくっていったわけですね。

ちなみに、信長公は、本能寺の変の6月2日、未明まで京都でお公家さんを招いてお茶会をしているわけです。ですから、あの本能寺の変で炎に包まれてなくなったものは道具としてかなりあるのですが、そういうことをなさった方です。

それを継いだのが豊臣秀吉公。この方は、お茶というものを信長公から継承して、イベント事、大茶会、今のお茶会のようなものをしまして、要するに市民一体、皆さんが参加するようなお茶をしたり、小間という小さな部屋で色々なお話をするということを進めていくわけですね。

そこで、千利休というのは、元々堺出身です。堺というところは、戦国時代は自治都市で、世界の中でも大変栄えた町なのですが、その中で貿易商、そういう家で利休が生まれたと。それから、信長公、秀吉公に仕えて、秀吉公の時は一番の天下人の宗匠としてお茶をする。利休居士からお茶を学ぶということが当時のステータスのような、この方からお茶の許可をいただいたらお茶ができると。秀吉公も信長公の家来の時はそういうことだったわけです。

実は、利休と利家公は関係があります。当時、利家公も様々な影響があって、周りがお茶をしていますので、その中で利休や織田有楽という方にお茶を習ったりされたわけです。

ちなみにこれは、金沢に残っています手紙ですけれど、利休が利家公に書いているわけです。どういうことかという、利家公が利休居士に小さなお魚を差し上げた。その魚に対して返戻で、「ありがとうございます。この魚を使って今度はお茶会をしたいので、是非、そのときはお越してください」という、こういう手紙での交流というのが頻繁に残っております。

これは唐物といいまして、今、前田育徳会が東京の駒場にございますが、前田家三名物の1つ、富士茄子という唐物の宋時代の茶入。最も道具としては価値があるというか、伝来がありまして、最初、室町将軍家の曲瀬道三という医者が持っていました、それから、信長公、秀吉公。秀吉公は晩年にこの有名な茶入を利家公に与えるということで、2人の間柄をうかがうことができます。

これは、京都の大徳寺というお寺です。茶禅一味、禅と茶というものが最もつながったのが京都の大徳寺です。大燈国師という方が元々つくられて、前田家の塔頭芳春院もこの中にあります。各大名はここに塔頭を持つということが1つのステータス、そういう時代があるわけですね。

実は、この山門部分をつくったことが、後で利休居士が切腹する要因になるのですが、要するに、利休居士が山門部分を寄進されたので、そういうことが起こったわけです。様々な説がありますが、美的感覚が利休居士と秀吉公で違っていた。例えば、秀吉公は金の茶室のようなものを好む。利休は黒の楽茶碗などを好むということで、そういう価値観が変わっていったなどと言われていますが、とにかく2階部分をつくるわけです。2階は非公開なのですが、私は時々、裏千家の案内でここに入ることがあります。鍵を開けると、2階の天井画が龍の絵です。正面にあるのが、これは秀吉公寄進の十六羅漢像。上を見ますと長谷川等伯が57歳の時に書いた絵です。等伯は、七尾からかなりの決意で本法寺という日蓮宗のお寺を頼って行きます。

先だって、安部龍太郎先生の「等伯」という小説もございました。要するに大徳寺の天井画を描くことは、ものすごく格が高いわけです。それをやはり利休や、秀吉公が、等伯、当時、狩野派が一世を治めていましたが、要するに長谷川派というのが入るのが晩年の57歳、これぐらいから等伯は活躍し始めるわけですね。

左の方には、利休の木像が安置してあります。桃山時代を一気に垣間見る場所にもなります。等伯はこういう金碧画というものを描いたりもしましたし、御存知の有名な国宝の松林図、七尾の松林ではないかとか様々な説がありますけれど、長男の久蔵という方が早逝しますので、そういう心境で描かれたのではないかなど、色々な説があります。

こちらが前田利長公ですね。利家公はやはり秀吉公にすごく重宝されまして、北野大茶会という北野天満宮で当時、大規模なお茶会を秀吉公が企画します。その時に、利家公は秀吉公の右か左に座りまして、そこでお茶席を担当すると。利休はその隣に座っているということで、すごく重宝される。晩年、2代目秀頼公がお若いうちに秀吉公が亡くなりますので、その子守役として利家公はずっと大阪城に残ると。五大老の1人として徳川家康に対して目を光らせると。ただ、半年後に利家公は亡くなりますから、今度はこの利長公が大阪城に入りますが、家康が「そろそろ金沢に帰ったらどうだ」ということで、帰らされてしまうわけです。家康が代わりに大阪城で実権を握ることなのですが、五大老の1人として利長公は仕えますが、大変な目に遭うわけですね。謀反の疑いをかけられたりするということがあります。その結果、芳春院、お松の方が前田家安泰のために14年間

江戸に人質として行くということになるわけです。参勤交代の最初とされていますね。

あと、金沢といえば、1人忘れてはいけない高山右近というキリシタン大名。これは元々、利休七哲といまして、利休7人弟子の1人です。キリシタンから改宗しませんでしたので国を追われますが、利家公、利長公が客分として加賀藩に呼び寄せると。色々と築城をお願いしたり、東の総構え堀、西の総構え堀、そういうものをこの方が指示していくと。右近は24年間金沢におりました。それで、家康政権になっても改宗しませんでしたから、マニラに流されると。1年後には亡くなるのですが、マニラの教会に行きますと、教会に今でも記録が残っていると。利休からもらった羽箒、物を清める道具ですけど、羽箒を持ってきたという記録が残っていると、マニラの教会の方が仰っていたことがありました。それだけ、金沢と高山右近というのは深い縁があるということですね。

その次が前田利常公。よく言われますね、利常公の時に今の工芸など、そういう基礎を固めた。3代利常公、5代綱紀公ぐらいから細工所、そういうものを設けて、今の基盤になったと言われております。利常公の晩年、利常公は4代光高公が亡くなった後に、最初に小松城に隠居されますね。光高公は早逝されますから、利常公がまた表舞台に出てくるということになります。その晩年、これは利休から数えて3代目、千宗旦という方です。「侘び宗旦」と言われています。この方が千家の基盤をつくった。三千家、この息子さんが3人分かれて三千家、裏千家、表千家、武者小路千家ということになります。ちなみにこれは今日庵、私が修行をしています。家元の玄関ですね、ここに宗旦がおられたと。宗旦の一番末子の仙叟という方が、利常公が小松城に最後の5年を隠居された時に、小松で利休直系の侘び茶の指南をするわけです。

その後、利常公が亡くなった後に、綱紀公が金沢に1661年、寛文元年に初めて19歳で金沢に江戸から入城したという記録がありますが、その前後に4代目の裏千家の仙叟という方が金沢に来たと言われているわけです。その4代目、宗旦の一番末子、利休から数えて4代目、仙叟という方が金沢に侘び茶の風情を伝えに前田家に、茶具茶道奉行として来ます。今も金沢にその場所があります。ここがその場所です。今から20年ほど前に、本岡三郎先生が、こちらの場所と昔の地図と今の地図を照らし合わせたらここだということが発見されたわけですね。そのとき、金沢市の山出前市長、皆さんで除幕式を裏千家としました。教育委員会の看板もここにあります。実はここには縁があって、私が今稽古して住んでいる場所です。というのは、祖父が晩年隠居していたところを、たまたま20年ほど前にこの場所だということを初めて本岡先生のおかげでわかったということです。稽古している場所がここになるわけなのですが。ここは目の前が東の総構え堀です。ですから、元々、川が、今も流れていまして、兼六園を通過して、この場所を通過して浅野川橋の隣まで流れていると。

そして、仙叟の遺跡としましては玉泉院丸跡地。これは昨年オープンしましたが、実際、当時、前田家の秘書が記録を全部したためています。その中に、綱紀公が仙叟居士にこの作庭を指南するように命じているという記録が残っています。ですからこの場所は、仙叟の考えというのがかなり強いと言われています。文献にきちんと残っているわけですね。

これは、西田邸ですね。脇田家という武士が住んでいました。仙叟の直弟子です。ここに灑雪亭という部屋があるのですが、金沢で最も古い茶室ですけど、ここも仙叟居士が指南したと言われています。この仙叟が、晩年に、利休100回忌、利休居士が亡くなって100年目というのが回ってきます。前田家にお許しを得て、一時京都に戻るわけですね。そ

れで、大徳寺というところで法要をして、利休御祖堂という、当時の利休木像を安置した最も清らかな場所があります。ここが実は、仙叟が金沢におりましたので、北陸の造りになっていると。たった3畳の部屋なのですが、最も神聖な場所がこういう金沢や北陸の造りになっていると言われていました。

それで、寛文6年、1666年に私の家の初代であります大樋長左衛門を金沢に同道して、京都の楽家にいた長左衛門を同道して、今度は仙叟好みの、加賀藩の焼き物を仙叟が焼かせるために連れてくると。これが私の家の始まりということになります。これは大樋美術館のギャラリーです。

仙叟居士が長左衛門と色々話しまして、飴釉というものを特徴に、加賀風の侘び茶の焼き物というのを一緒につくっていくわけです。ですから、こういう櫛目がある、これは水の流れですね。水にちなんだ物が多いです。これも有名な県の文化財ですが、初代長左衛門。海老がいまして、横に水があると。先ほど申し上げたように、東の総構え堀という、当時、家の前に川があるわけです。京都の家元の前も小川通という川が暗渠になっています。ですから、40年、仙叟という方は、金沢と京都を行ったり来たりなさいますから、こういう家の前に行くと水があって川えびがぴょんと跳ねてみたり、水の流れなど、そういう日常のものをこうやって意匠として入れたのではないかとされています。

76歳まで仙叟居士は大手町、旧味噌蔵町に住んで、綱紀公の指南役をするわけですね。例えば、利休七哲はどういう人だと聞かれましたら、最初に「利長公です」と答えた記録が残っています。要するに前田家に対して配慮されて答えている。また、城下の床の間の設えをどうしたら良いかということも聞かれています。76歳まで前田、仙叟の地図が残っています。晩年78歳で戻りまして亡くなるということですが、京都の大徳寺と、月心寺という東山にお寺があります。金沢のこの場所に仙叟居士のお墓があって、今も23日、命日には全国屈指の会員のお茶会があります。その横には、仙叟の大樋焼のお墓もあるということ。歴史的にこういう経緯があります。

加賀の焼き物とこういう現代的な焼き物とを連合していくと。こういう創作と継承というのは、これは加賀藩というか、そういう気質というところかもしれませんね。やはり、京都の雅という文化と、ちょうど利常公の奥様が珠姫という方で、その姉妹は東福門院という方です。この方は当時の後水尾天皇に仕えと。ですから、そこで徳川幕府と前田家と御所が縁戚関係になるということで、そういうところで京都から色々な方を呼ぶ、江戸からも色々な文化人を呼んで、加賀藩の工芸であるとか文化というのを高めたというのがやはり大きい時代ですね。

これは、色々な文化人が昔から石川県に来られますから、実家でこうやって茶碗をつくったりする、こういう交流というのがあります。これは、元野村證券ですね、野村美術館とありますが。これは石川県ゆかりだった中川一政画伯、松任に美術館がありますね。この方は湯河原でしたけれど、御両親は石川でしたから、そういう関係の方、芸術家、文化人という方は多いですね。

これは、兄ですけれども、この前襲名をしましたので載せましたが、代々同じものをつくらない。これは、私の昔若い頃ですが、こうやって作品なんかをつくる。

初代長左衛門のところに様々な方が来ます。これは宮崎寒雉という釜師ですが、これが面白いのは、前に「芳土庵」という字が彫ってありまして、「芳土庵」というのは初代長左衛門の庵号です。この字体は仙叟居士の字です。初代長左衛門、寒雉が作っているという、

そういうふうには3人の時代が合作というか合うようなものですね。

そして、綱紀公は、こういう書物を集めると。ですから、当時、新井白石が「加賀は天下の書府なり」と。これだけ蔵書がたくさん、世界のものがあると言われるわけです。五十嵐道甫、京都から加賀蒔絵の祖と言われてはいますが、こういう方をお呼びして加賀藩として奨励していく。要するに色々なそういう文化を入れていく。久隅守景、狩野探幽四天王と言われてはいますが、こういう方も客人として呼ぶ。

あと、加賀象嵌、これは鐙ですけど、鐙というのは、ただ、馬に乗る時に足を乗せるものですが、これを象嵌しまして、ただ、1つとして同じ模様がないと言われてはいますね。日本海経由、北前船経由で東北とか北海道、九州、至るところに渡っていますが、私も実際に出張に行くと、あるお寺さんでこういう鐙を見たりしますし、全国でも有名な土産物だったわけです。能面、宝生流というのがあります。

加賀藩が力を入れて、大体24の御細工所を当時指定したと言われてはいますね。藩の中に職人もいる、それで賄い切れないので、今度は城下で依頼する。そういうところで、例えば茶の湯を通して、お城の中と城下の方が茶の湯で交流するというのが大きいです。特に加賀藩はそれが大きいですね。色々な全国の藩がありますが、お城の中だけでお茶をしているというのはありますが、藩から城下までお茶が浸透しているというのは、やはりこの金沢の、石川の特徴でもあります。

九谷ですね。利治公が大聖寺藩をつくられて、これは同じ時代ですね、利常公の息子さんですから。茶の湯が盛んということは色々な御菓子も盛んになります。これは長生殿という有名な御菓子です。これは丹頂といまして、裏千家14代目家元のお好みです。尾山神社の献茶式で昔金沢に来られました。その時に御自身が誕生日で、たまたま鶴を子飼いにしており、御菓子を与えていまして、鶴を見て自分の誕生日とかけて、「タンチョウヅル」と「誕生」ということで、こういう絵をぱっとかいて、お好みとされたりもしています。そして、こういう水引、こういうのも、こういう地方ならではだと思えますね。

これはかぶら寿司ですが、豪華なものと豪華のものを合わせたりするというのも1つの特色ですし、治部煮というのも有名ですが、例えば、治部煮だったら治部碗という御碗をつくるわけですね。これも塗り物、蒔絵というのものにも通じていく。かぶら寿司だったらこれをのせる器、そういうものも考えて、加賀料理というのも、器と料理がまた切磋琢磨していると。

今度幕末になりますと、井伊直弼が桜田門外の変で倒れますが、元々は大茶人でした。当時、武将は皆さんお茶をされていますが、この方は、実はお茶の宗匠になろうと思ったわけです。下の弟でしたから。でも、縁がありまして、お兄さんが早く亡くなったりして、自分が井伊家というのを継ぐわけですが、色々なことを言われておりますけれど、この方は大茶人で最近見直されている部分があります。今日は資料がありますが、ちょっと目を通していただきたいと思えます。これは独座観念という「茶湯一会集」というこの方が本を書かれた中で出てくる一文です。

「主客とも余情残心を催し、退出の挨拶終れハ、客も露地を出るに、高声に咄さず、静_ニあと見かへり出行は、亭主ハ猶更のこと、客の見へさるまでも見送る也、扱、中潜り、猿戸、その外、戸障子など、早々_ハ立なといたすハ、不興千万、一日の饗応も無になる事なれハ、決而客の帰路見へすとも、取かた付急くへからず、いかにも心静_ニ茶席ニ立もとり、此時にしり上りより這入、炉前_ニ独座して、今暫く御咄も有へき_ニ、もはや何方まで可被参

哉、今日一期一会済てふたゝひかへらさる事を観念シ、或ハ独服をもいたす事、是一会極意の習なり、此時寂莫として打語ふものとしてハ釜一口のミ_二シて外_二物なし、誠_二自得せされはいたりかたき境界なり」

これは有名な一文ですが、要するにお茶会をしているわけです。その中で、客の姿を見送った後、一度茶室に戻って釜の前に座って、「あの方は今頃もう帰路についてどの辺にいるかな」と思いを馳せ、そして、今日1日、自分が亭主をしたことを振り返る。そして、ここに「一期一会」と書いてあります。一期一会という言葉は、最近居酒屋さんに行っても書いてありますけれど、ここで初めて一期一会という言葉が出てくるわけです。要するに、これはお茶人が考えた言葉です。今日は再び帰らない、同じことは二度とないということの、お茶を通しての言葉であるわけです。ですから、ここには「観念」という仏教用語みたいなことも書いてあるのですね。いかにお茶というものを通して、真剣勝負、客と亭主が、もう何日も前から、亭主は客のことを思って準備していくと。ですから、この心というのは、お茶に限らず、今、忘れかけている言葉として、この一期一会というのは考えるべきことかもしれません。これを幕末にこういう方が考えられているわけです。

あと、金沢は裏千家でいうと11代目の玄々斎が明治8年から9年、3か月、金沢に逗留されます。京都の家元を出て、わざわざ金沢に来られる。やはり仙叟以来のお茶どころ。そして、京都、江戸というのは当時、東京は大打撃を受けるわけです。西洋文化が入ってくる。その中で金沢、石川県というのは唯一前田家の恩恵で文化がすごく残っていたわけです。ですから、全国から文化人、当時の茶道具とか、色々なものが金沢に来るわけです。月心寺のお寺にもお参りなさるということをするわけです。

実は玄々斎は、明治時代になると立礼というのを考えます。椅子、テーブルのお茶。お茶で初めて正座ではなくて、椅子、テーブルというのを考えます。これは、祇園の「都をどり」ですけど、これは明治5年、万国博覧会の時から始めていますから、今も5つの茶屋街では、この立礼というのを裏千家が指導しているわけです。

そして、財界でいうと井上世外。伊藤博文と大変懇意の明治の元勳と言われています。この方も今から百数年前に金沢に来ます。何しに来られたかという、お茶をしに来られた。高橋是清、それと、早川千吉郎という当時の日銀総裁、金沢出身でしたので、その方を一緒に伴って、案内をしながら電車を貸し切って来ると。金沢の色々なお茶に参加して、お道具を見たりするわけです。実はこの方もお茶をしていました。利休の手紙、早船という茶碗の手紙を持ってまして、当時、金沢にその茶碗があったわけです。それと対面して、そうしたら持って帰ろうとするわけですね。ただ、拒まれて持って帰れないのですが。8代長左衛門のところまで茶碗をつくったりしまして、一行は帰られるわけです。それから、七尾出身で畠山家の末裔の荏原製作所の畠山一清、この方も大茶人でして、畠山美術館というものがあります。

鈴木大拙先生ですけど、この方は、「禅と日本文化」という本の中にも、利休やお茶のことを書いています。コロンビア大学の御講演の時、裏千家の前家元、鵬雲斎大宗匠と1か月御一緒だったと。ですから、大拙記念館のオープニングの講演会を大宗匠がさせていただきました。

これは、金沢おどりですね。裏千家、京都もこうやっておどりの時はお茶をしています。そういうことで、お茶というのは何となく堅苦しい、足が痛い、何かとつつきにくいという思いがあるかもしれませんが、やはり文化的交流、それから、歴史、先ほどの一期一

会もございますし、石川は特にお茶が盛んだということもあります。金沢の文化、もてなしの心、もてなしということまではいかないかもしれませんが、先ほどの独座観念ということが言葉としては大事な言葉として御紹介させていただきました。

それと、今日は福井の方もお出でですから、玄々斎は松平家、岡崎の大給藩というところから来られています。ですから、福井も松平さんですから、大宗匠とは御縁があるわけです。北陸3県には、こういう文化的土壌があります。そういうことで今日はお話をさせていただきました。長々とお話をして失礼いたしました。ありがとうございました。

以上